

第百十一話 満蒙開拓団、悲惨な逃避行！

終戦というか敗戦に伴う悲劇の一つが、日ソ中立条約を破って侵攻してきたソ連軍から逃げ惑う満蒙開拓団の苦難である。居留民を保護すべき関東軍の判断ミスもあり、その逃避行は筆舌に尽くし難いものであった。その一端を紹介する。今なお、残された課題もある。

1 終戦時の満蒙開拓団等の状況

開拓団 926団、24万2300人、義勇隊訓練所 102隊22,800人

報国農場 74場 4900人 合計26万9千人

その内4万7千人が動員されていたので、開拓団員数は22万3千人

その大半が、老人、女性、子供

死亡者 約8万人（在満州邦人死者総数20万人の4割を占める。）

2 関東軍等の居留邦人対策

日ソ開戦の危険が迫り、関東軍は在満居留民を内地へ移動させる案を検討するも、実現可能性なく断念、朝鮮半島も戦場となる恐れあり不適と判断し、国境沿いの放棄地区から関東軍抵抗陣地の後方に移動させる案を総司令部一課に提案したが、防諜上の理由で却下された。一方、満州開拓総局は開拓団に対する非常措置を連絡するも開拓団も居留民も事態を深刻に捉えていなかった。東京の中央省庁からは在満居留民の措置について何も明示されなかった。ソ連侵攻に際して、引き揚げ命令が発出されても、待避を潔しとはしなかった。それ程、無敵関東軍に対する信頼は絶大？

大本營の命令を受領した侵攻翌日の10日、居留民待避を検討開始し、民・官・軍の順で退避させることを決定したが、所詮無理であり、集まった者から順次列車移動させることとした。

①ソ連侵攻の予見可能性と事前準備の可能性

②奇襲侵攻であり、現場も大混乱し、情報周知もままならず、軍の意図的な行為と断ずるのは酷

③第一線部隊は居留民保護に努めるも、ソ連軍との戦闘中でもあり、救出も殆ど不可能

3 悲惨な逃避行等

逃避行の状況は、「検証・満州一九四五年夏 満蒙開拓団の終焉」に詳しいが、幾つかの事例を列記するに止める。

①ソ連軍、満州民、匪賊による暴行・略奪・虐殺（葛根廟事件等）

②集団自決 霞城集落、小古洞開拓団、来民開拓団、高田開拓団等々

③飢餓・疾患・疲労で逃避行中に生き別れ、脱落

④戦闘に巻き込まれた ハタホ開拓団

⑤上掲書の小項目を参考までに列記する。

「死体の山、足が動いた」「病魔に食い尽くされた三俣流開拓団」「散りぢりになって壊滅した南雲山開拓団」「死の淵から這い上がった姉妹」「目を覆う死者の群れ」「墓は松花江の流れ」「引き揚げ船内で死ぬ」「暴民の標的とされた開拓団」

⑥黒川開拓団：奇跡的全員帰国の裏には、人身御供として女性をソ連兵に差し出し保護された悲しき物語。

⑦襁褓を纏い、女性は丸刈りに

⑧残留孤児問題や残留婦人問題の発生 今なお解決とは言えず

* 終戦時の各種状況を知れば知るほど、許し難い国は某国であると思わざるを得ない。

それにしても、予見可能性の問題はあるが、ソ連軍の侵攻を予測して事前に対策を講ずべきであった中央・現地の行政及び軍の対応は残念だ。二度と同じ悲劇は！

（第百十一話 了）